

論 文

## 音楽科教員養成における教科専門科目「器楽特講」の内容構成 に関する一考察：地域貢献活動を目指して

A Study on the Content Composition of the Class on Subject Specialty 'Instrumental Music Special Lessons' in Music and Teacher Education: Beyond the Community Contribution Activities

金 奎道 (高知大学教育学部)<sup>1</sup>

梶原 彰人 (高知大学教育学部)<sup>2</sup>

Gyudo Kim<sup>1</sup> and Akito Kajiwara<sup>2</sup>

*1&2 Faculty of Education, Kochi University*

### ABSTRACT

Curriculum at teacher training university should originally contribute to the development of education by using the problems at school sites as a subject of academic research, but it can be said that the problem is that content that is mainly unrelated to the growth and development of children. In other words, there are no different classes than the curriculum at music universities or art universities, which are the problems of the class on subject specialty in music education.

The purpose of this study is to systematize the composition of the curriculum contents by designing 'instrumental music special lessons' as a program to correspond with the class on subject specialty and the class on subject education that related to the curriculum of Faculty of Education, Kochi University. Research methods take practical measures. First of all, seek the relationship between the class on subject specialty and the class on subject education as part of community contribution activities. Next, verify this activity in light of the perspectives of music and curriculum contents composition. The community contribution activity here means a summer vacation music experience for children in the middle mountainous area.

Undergraduates have devised the selection of songs and the rhythm patterns of each part to plan and practice the activities of making and enjoying musical instruments with children, that is, 'instrument challenge'. Looking at the conversation or exchange of students and children in the activities of making musical instruments and playing them together with completed instruments, it was seen that most of them are focused on the Form, Skill, and Cultural aspects of music, and that learning of the aspect of Substance focused on the feeling and sensation of music has become neglected.

As such, by organizing education content from both sides of the class on subject specialty and the class on subject education, university students can improve their performance with broader perspectives and seek practical measures through academic exploration that is conscious of children's growth and development.

## I 序論

## 1. 問題の所在

## (1) 教科専門科目における教育実践の欠如

教員養成大学・学部で教科専門科目の授業は、学校教育の教科内容との結びつきが少ないと批判されてきた。教員養成大学・学部の教科専門科目の教育内容は、本来は学校教育の教育実践を視野において扱うべきであるが、子ども達の成長や発達を想定した内容になっていないということである<sup>1)</sup>。つまり、音楽大学・芸術大学の教科専門科目と同様の授業が行われるのが、昨今の音楽科教育における教科専門の問題点であろう。

西園芳信(2009)<sup>2)</sup>は、教員養成において、教育実践の場面を視野に入れた教科内容学の必要性について言及し、教科専門が対象としている学問や芸術等の内容を教育実践における教科内容として構成し、体系的に捉えるべきと述べている。小島律子(2002)<sup>3)</sup>は、人間の発達に応じて教育内容の体系を構築していくには、音楽を人間と切り離して捉えるのではなく、音楽と人間とのかかわりを意識して対象化することが重要であるという。たとえば、音楽大学でインドネシアのガムラン音楽の授業を受けるときは、口頭伝承による音楽学習に重点が置かれ、譜面を用いず教員の実演を模倣するやり方で古典曲を修得していても授業として成り立つ。しかし教員養成大学・学部の授業では、小中学校の児童生徒を想定し、人と地域と音楽との観点からインドネシアの自然・風土・歴史などの文化的側面を扱うことが必要となる。そして場合によっては、口伝以外に数字譜等も用いることで子どもへの学習支援を行うことが考えられる。ガムランの初歩的な奏法を学ぶ活動だけでは指導内容が見えにくいからであろう。

現在、高知大学教育学部における実技を専門とする科目「器楽」<sup>4)</sup>では、独奏・合奏・伴奏などの表現活動を通して、さまざまな楽器の演奏技能を習得することと、演奏及び理論に関する音楽的知識を培うことが目的となっている。また「初等音楽」では、音楽を学習する上で基礎になる鍵盤楽器(ピアノ)の演奏技術と弾き歌いを習得することを目指している。それぞれは、小学校教諭免許状や中学校教諭免許状(音楽)の取得のために履修しなければならない専門科目であるため、いずれも演奏技能の向上のみならず教育実践を見据えて、学校教育における指導内容と関連付けることが求められる。

上記のことから、高知大学教育学部における音楽の教科に関する科目「器楽特講」では、教科専門と教科教育の教員が協働で担当し、児童生徒の確かな学力形成に寄与する教科内容構成を目的とし、カリキュラムの見直しを通して授業改善を推し進めている。そこで子どもの成長発達の視点と教科の教育内容を結びつけるためには、どのような教科内容の構成原理が必要であり、教科専門と教科教育を架

橋する授業の在り方をどう見直すのか、という課題意識をもつに至った。

## (2) 教科専門と教科教育との関連

2001年「国立の教員養成大学・学部の在り方に関する懇談会」の報告書『今後の国立大学の教員養成大学・学部の在り方について(報告)』にて教員養成教育が本格的に議論され、以後、教員養成大学・学部の独自性が打ち出されるようになった。教員養成コア・カリキュラム(2006)をみると、教科専門と教科教育とが架橋するところに「教科内容学」を位置付けている。この「教科内容学」とは、各教科の学習指導要領が示す教科内容の柱立ての体系と捉えられており、このコア領域を「教育実践学」とすることによって、学校教育における各教科の指導内容が体系的に理解できるという<sup>5)</sup>。

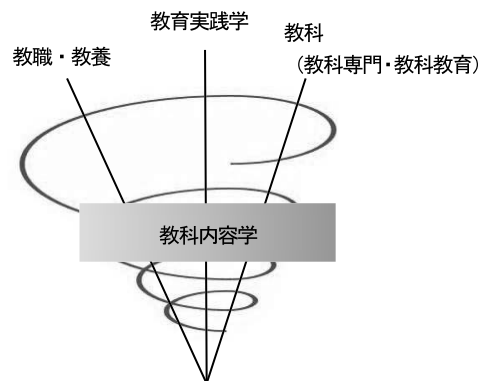


図1 教育実践学と教職・教養及び教科(教科専門・教科教育)との関連<sup>6)</sup>(西園2006の図を改訂)

つまり、左軸には教職科目・教養科目があり、右軸には教科専門・教科教育が位置し、中心にある教育実践学との関連でこれらの教育内容が螺旋型に学習されるものとして構想したのである。そして音楽科の教育内容<sup>7)</sup>は、音楽の形式的側面(音楽の素材としての音、音楽の構造)、内容的側面(音楽によって喚起されるイメージや感情)、技能的側面(音楽の表現における技能)、文化的側面(音楽の背景となる文化や歴史など)の観点から捉えられ、この4つの柱が音楽科の教科内容構成の原理となりうるという。

他方、実際の音楽科授業の中から教科構成原理を求め、音楽科教員養成のモデル・コア・カリキュラムとして「専門教育科目」「教科構成学科目」「教育実習関係」の3本柱とする音楽科の構成原理がある。ここでは教科内容科目と教科教育科目が架橋する学問領域として教科構成学を設け、系統的に指導しようとする。つまり、教科構成学における教科内容科目(教科専門)は一般的な専門教育とは異なり、常に教育実践を意識して行われるべきであり、教科教育科目は教科内容科目で教えらるる内容をよく理解し、

それを踏まえた授業構成とする<sup>8)</sup>、ということである。また、教職専門科目の視点を十分理解したうえで、学生の指導に活かすことが音楽科教員養成に必要とされる教科構成学の体系である。

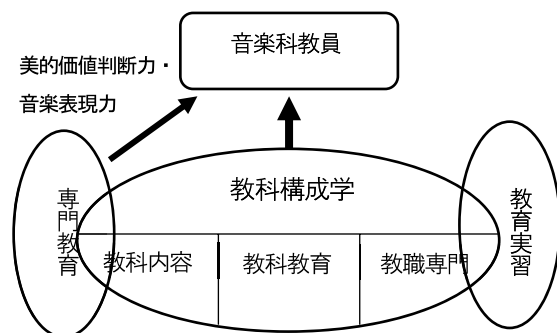


図2 音楽科教員養成における教科構成原理<sup>9)</sup>

以上のように、教員養成大学・学部における教科専門と教科教育という枠組みの見直しによって教科内容学が位置付けられ、教育内容の体系的な理解が求められている。要するに、音楽科の構成原理は教育実践の視点と、より音楽科授業を意識することによって子どもの成長発達に寄与できるものとなり、そこに教科専門と教科教育を架橋する必要性が生じるといえよう。

(3) 授業実践を核とするための教科教育と教科専門の協働

初等音楽科内容学の取組みをみると、音楽教育講座の教科専門と教科教育の教員が協力し合って、あらゆる領域（音楽の基礎、声楽、ピアノ、リコーダー、合奏、合唱、指揮法、音楽づくり）を扱い、それぞれの役割や関係性を理解しつつ学生にバランスよく指導できるようになったという。学生にとっても音楽を総合的に捉える中で、声楽やピアノなど特定領域の苦手意識が音楽全般へと結びつくことは起こりにくくなったと報告する<sup>10)</sup>。

また、教科専門担当教員と教科教育担当教員が協働で担当した学部授業科目「音楽科指導法Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」では、分野の異なる複数の教員が共に授業を行うことにより生じる新たな知見があったという。そうした知見は教員同士のみならず学生も享受することにより、学生、教員の双方にとって「学びの流れ」が明確になると述べている<sup>11)</sup>。

教科専門担当教員による単独の授業においても、学校の授業内容や教育・指導実践に関連づけることで教員養成学部への特化を図る取組みもある。たとえば、「声楽指導法概説」では発声機能の理解と発声指導の理解、歌唱表現と歌唱指導の理解、歌唱指導における指揮・指導実践を通して音楽科授業における実技指導の理解を深める。「器楽指導法概説」では、器楽に関する専門的な知識や技能の理解をさらに深めることにより、生徒の能力を引き出し高める

指導力や、学校教育における授業構想力を育むことがねらいとされる<sup>12)</sup>。

以上のように、2001年以來、教員養成大学・学部の在り方は著しく変わりつつある。それぞれの立場から学生への学びを支援する体制がつくられると、教員養成大学・学部の授業に相応しい教育内容の改善が期待される。しかしながら、上記に示す教育実践を視野に入れたとしても、教科専門単独の授業や複数教員によるオムニバス形式のような授業形態では、教科専門と教科教育の結びつきが薄いのではないかと考えられる。相互の関係から教育内容を捉え、より教育実践的な授業内容を盛り込むためには教科専門と教科教育の協働による授業実践を増やしていく必要がある。

## 2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、高知大学教育学部の教科に関する科目「器楽特講」を、教科専門と教科教育を往還するプログラムとして検討することで、教科内容構成の体系化を図ることである。

研究の方法は実践的方法をとる。まず、地域貢献活動の要素を取り入れた教科内容として「器楽特講」を構成し、教科専門と教科教育の関わり方を模索する。つぎに、「楽器にチャレンジ」を音楽科の教科内容構成の観点より明らかにする。なお、ここで言う地域貢献活動とは、中山間地域<sup>3)</sup>の小学生を対象に行う夏休みの体験教室で、教員養成課程の学生が主体的に企画し実施する音楽活動のことである。

## Ⅱ サマーチャレンジ！ スクスクールの取組

通年（集中）で行われる教科に関する科目「器楽特講」では、楽器（主に管楽器や打楽器）の実演による鑑賞活動と楽器づくりを取り入れた体験活動、そして親子向けのコンサートが主な内容である。この科目の履修資格は原則として「器楽Ⅰ」習得済者で、賛助学生を含めそのほとんどが音楽教育コースの学生である。

その中で「器楽特講」の核となる体験活動とは、高知県香美市香北町の保護者有志で構成される大宮スクスクの会<sup>14)</sup>が主催する、小学生を対象とした夏休みのサマーチャレンジ！ スクスクール（以下、スクスクールと称する）のことである。中山間地域の子どもの達にも様々な体験をしてほしいという保護者らの要望に応えるべく、地域で活躍している専門家による体験教室<sup>15)</sup>や、中学校の部活動にチャレンジする催し等を設定し、2016年から毎年開催している。2017年からは教育学部後援事業として「楽器にチャレンジ」を催すこととなり、地域貢献活動と関連づけて「器楽特講」の授業内容に盛り込んでいる。

スクスクールにおける「楽器にチャレンジ」は体験教室の企画運営から演奏まで、教員養成課程の学生が主体的に

取り組む課外活動で、いわゆるアウトリーチ活動である。

「器楽特講」は開講当初から、音楽の実践能力習得だけに拘らず、地域の要望に応じるための新しい教員養成を目指し、教科専門と教科教育が緊密な連携をとっている。こうした取り組みは、教育実践を視野に入れた活動であり、音楽科授業を意識した体系的なプログラムとして再構築することができると考えられる。さらに、教員養成課程の学生にとってもこれからの時代に求められる教員の資質能力を身に付けることが期待できよう。

では、子どものための音楽表現活動である「楽器にチャレンジ」について概観し、①「実演を交えた楽器紹介の場面」、②「自分だけの手づくり楽器であそぶ場面」について、音楽科の教育内容の4つの観点から検討することで、「器楽特講」の内容構成を明らかにする。

## 1. 「楽器にチャレンジ 2018 編」

～自分だけの手づくり楽器であそぼう～

2018 年の「第3回サマーチャレンジ スクスクール」においては、本学の幼児教育コース・美術教育コースによる幼小連携を意識した創作活動の出張あそびや<sup>10)</sup>と、音楽教育コースによる手づくり楽器と演奏体験を主とした「楽器にチャレンジ」、そして中高大学が連携して行う「一番星☆コンサート」を実施した。その他には「着付けにチャレンジ」、「森遊びにチャレンジ」、「中学校の部活にチャレンジ」など様々な課外活動が行われ、全 11 のチャレンジに 184 名の応募があった。その中で「楽器にチャレンジ」には 29 名が参加した。

### ①実演を交えた楽器紹介（フルート、トランペット、サクソフォン）の場面

まず、初対面の大学生と子ども同士が出会うことを考慮し、ドイツのフォークダンス《Break mixer》を用いてアイスブレイクを行った。これは音楽に合わせて決まった動きをし、次々とパートナーをチェンジしていくダンスであるが、子どもは手をつないだり知らない人と触れ合ったりにすることに抵抗感をもっていることが多少見受けられた。

その後、パートごとに楽器紹介と簡単な曲を演奏した。例えば、トランペットの楽器紹介はつぎのようであった。

T：これ何という楽器か、皆知っちゃう？

C1：フルート

T：確かに金属だけど、先チラッと聞こえたけど、誰か。

C2：トランペット

T：はい、トランペットです。これは、金属でできた金管楽器です。これ大体何年前に作られたと思う？

Cs：一億年前（皆笑う）。千年前、200 年前…

T：これ 3000 年前に作られたとされています。3000 年前はどういう？

C3：えーと、恐竜時代？

（中略）

T：このトランペットは、普通に息を入れるだけじゃ、音が鳴りません（実演）。この楽器は唇を震わせることで音が出ます。この小さいマウスピースでやってみます（実演）。何かそれっぽくなりましたね。これを楽器に付けたらどんな音になるでしょう（実演）。（二人で簡単な 2 重奏を吹く）

T：トランペットはこうした華やかな、力強い音の特徴の楽器です。今度は一人で吹きます。ヘンデル作曲の《調子の良い鍛冶屋》という曲です。

T：大学生、C：子ども

少し和んだ雰囲気となり、大学生による楽器紹介がはじまる。学生らは楽器を演奏する前に、子ども達にそれぞれの楽器の由来や素材、発音原理など（文化的側面）を説明してから実演（技能的側面）を行った。要するにここでは、音楽の教育内容を文化的側面・技能的側面から構成しているようにすることが窺える。

### ②自分だけの手づくり楽器であそぶ場面

この活動においては、楽器づくりのための材料の準備、製作の過程、そして楽器の生かし方などを、予め大学生に意識させた。材料は身の回りの素材やホームセンターなどで手に入れやすいものを中心に選定した。それを子どもの発達段階に応じ、大学生が素材を加工し与えた。例えば、木材の切断や穴掘りに必要なノコギリとドリル作業は安全面を考慮し、子どもにはさせない方向で決めた。そして、製作の工程等を前もってシミュレーションし、模造紙に製作手順をわかりやすくまとめた（表 1）。



図3 ガムテープ de ドラムづくり(8月22日、筆者撮影)

まずは大学生による模範演奏《Marakatu》by Werner stadler から発音原理（振って音の出る楽器、叩いて音の出る楽器等）や奏法に興味関心をもつよう配慮した。その後、子どもは予め用意されている楽器づくりコーナーをまわりながら、自分たちがつくってみたいところへ自由に移動



した。楽器の製作においては、人数制限を設けないため十分な量の材料を用意したが、ガムテープドラム・ラットル・ロッズ・お椀ドラムのそれぞれのコーナーには、5～8人ずつ分かれた。

作業に取り掛かり自分たちのマイ楽器が出来上がると、大学生は子どもに、楽器の持ち方や音の鳴らし方などを説明した。そして、大学生らが考案したそれぞれの楽器のリズムパターンを子どもと一緒に練習した（図4）。

このリズムパターンは、大学生同士の打ち合わせを通してつくり出したものである。とりわけ、各々の楽器の特性を生かしたリズムであること、小学生でも真似できる簡単なリズムであること、4種の楽器のまとまりを工夫したリズムアンサンブルが出来ることなど、技能的側面を意識するよう促した。

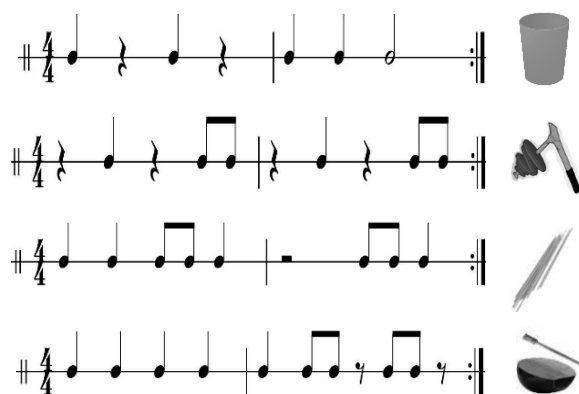

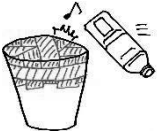




図4 大学生が考案したリズムパターン

表1 手づくり楽器の製作工程（2018年8月22日）

 <p>「お椀ドラム」</p> <p>お椀 木の棒 木球</p>	 <p>「ガムテープドラム」</p> <p>ガムテープ ゴミ箱 ペットボトル</p>
<p>①お椀を紙やすりで削る ②木の板とお椀をくっつける ③棒に木球をくっつける</p>	<p>①ガムテープでゴミ箱の口をふさぐ ②その時にガムテープはピンと貼っておく ③ペットボトルにビーズ等を入れる</p>
 <p>「ラットル」</p> <p>竹ぐし、ボンド、 輪ゴム、ホース、 タコ糸</p>	 <p>「ロッズ（リズム棒）」</p> <p>木の棒、ビーズ、 木の板、コルク栓 グルーガン</p>
<p>①太い木の棒に穴をあけて、細い木の棒を通す ②片側をコルク栓でとめて、接着する ③音を鳴らすための木の板とビーズを挟む ④コルクでふたをして、グルーガンで接着する</p>	<p>①15本位の竹ぐしの真ん中を輪ゴムでまとめる ②下部にボンドを塗って、タコ糸で巻き縛る ③輪ゴムをのける ④竹ぐしの先とタコ糸を覆うようにホースを付ける</p>

※「器楽特講」の受講生が作成したものを基にしている。

最後には、マイ楽器を用いたラテン風楽曲《テキーラ Tequila》<sup>17)</sup>のアンサンブルを目指し、《テキーラ》から抽出したリズムパターン（あるいは似合うリズム）を子どもに模倣させたり、動きを取り入れたりしながらグループ活動を楽しんだ。

《テキーラ》は吹奏楽部・ブラスバンドに定番のレパートリーとして演奏されることが多い楽曲であり、初めて聴く人でも「タン、タン、タン、う、タン、タン、タ、タタ、タン」と繰り返されるリズムを楽しめる理由から、大学生同士の話し合いの中で決められた。そして演奏の途中には、即興の部分を取り入れ、手づくり楽器ごとに見せ場を与えた。

子どもは、大学生によるトランペット、フルート、サクソフォ

ン、キーボード等の演奏に合わせ、手づくり楽器のリズムを打つ。音楽の途中にはキーボードの伴奏に合わせ、手づくり楽器のリズムを即興的に組み合わせながら子どもと一緒に音楽を楽しむ、という活動である。

上記では、手づくり楽器の製作は打楽器が中心であるため、旋律楽器のごとく正しい音程や響きを奏でることはあまり望めなかった。その代わり、音色の違いを楽しみながら手づくり楽器の特性を生かしたリズム遊びができるよう促した（形式的側面、技能的側面）。また、その後の学習の展開については、それぞれの手づくり楽器のみのアンサンブルと既製楽器と混合したアンサンブルを考えた（技能的側面）。しかし音や音楽を内容的側面の

観点から捉え、大学生と子どもがつくった楽器でイメージ・雰囲気などを感じ取ったり話し合ったりすることは見られなかった。

## 2. 「楽器にチャレンジ 2019 編」

～自分だけの手づくり楽器であそぼう～

2019 年の「第4回サマーチャレンジ スクスクール」については、2018 年を踏襲し従来通り継続することとした。本学の幼児教育コース・美術教育コースによる幼小連携を意識した創作活動の出張あそびやと、音楽教育コースによる手づくり楽器と演奏体験を主とした「楽器にチャレンジ」、そして中高大が連携して行う「一番星☆コンサート」を実施した。その他には「ボタンクにチャレンジ」、「将棋にチャレンジ」、「お料理づくりにチャレンジ」など様々な課外活動が行われ、全8つのチャレンジに186名の子どもの応募があった。その中で「楽器にチャレンジ」には小1～6学年まで28名が参加するほど、子どもの活動を支える地域の行事として定着しつつある。

では、子どものための音楽表現活動である「楽器にチャレンジ」について概観し、①「実演を交えた楽器紹介の場面」、②「自分だけの手づくり楽器であそぶ場面」を音楽科の教育内容の4つの観点から検討する。

### ①実演を交えた楽器紹介（トランペット、フルート、ピアノ、サクソフォン）の場面

サマーチャレンジは、異年齢間の遊びや他学校区との交流の場を提供することにも意義がある。初対面の大学生を含め他学校区の子とも同士が出会うことを考慮し、緊張を解すためにアイスブレイクを行った。今回は、メキシコのフォークソング《La Raspa》を用いたじゃんけん列車ゲームと、リレー式にリーダーの動きを真似するゲームを行った。

その後、パートごとに楽器紹介と簡単な曲を演奏した。例えば、ピアノの楽器紹介はつぎのようであった。

T：私が今から紹介するのは皆知っているピアノです。

T：ピアノ、今習っているよって人？

C：（10人以上が手を挙げる）

T：ピアノ、本当の名前は何かというでしょう？

じゃ、3つの選択肢があります。

（中略）

T：何でピアノフォルテかという、弱い音から強い音まで色々な音が出るよっていうので、ピアノフォルテという名前が付けられています。

T：2つ目の問題。白と黒の鍵盤があるけど、何個あると思う？

C：100個、10個、（適当に数字を言い当てる）

T：ピアノを使ってショパンが作った《幻想即興曲》を弾きたいと思います。

T：大学生、C：子ども

学生らはそれぞれの楽器演奏を行う前に、子ども達に楽器の仕

組みや構造、発音原理などをわかりやすく説明している。ここでは、ピアノという名の由来やピアノの鍵盤数をクイズ形式で問うた。いずれも知識・理解へのアプローチを求めているが、音の強弱（形式的側面）に注目させたこと、ピアノへの興味関心を引き寄せてから実演（技能的側面）を行ったことから、音楽の教育内容を形式的側面と技能的側面から構成していこうとすることが窺える。

### ②自分だけの手づくり楽器であそぶ場面

今回の「楽器にチャレンジ」では、紙パックギロ、王冠カスターネット、ガチャケースマラカス、マリンシェイカーの4種の楽器づくりを構想した。学生らはゲームセンター、100円ショップ、ホームセンター等をまわりながら材料を入手し、子どもの発達段階を考慮して何度も材料を確かめる試作・検討会を実施した。

こうした試作・検討会は、失敗を繰り返しながらも楽器づくり活動の見通しを立てたり、より良い解決策を探したりする意図があり、2018年の活動よりも子どもの成長や発達を想定した内容となるよう心掛けた。例えば、王冠カスターネットづくりの場合、最初は段ボール一枚に王冠を貼り付けることしか思い浮かなかったが、試作工程を経て楽器の構造が理解でき、ストローを挟むことで跳ね返りを施したり、持ちやすくするためゴム紐を付けたりするなど、学生自らが楽器づくりの課題を見つけ、その解決策を講じた。

当日は、子どもに4種の楽器の音を聞かせたあと、自分たちがつくりたい楽器を自由に選んだ。子どもは大学生の指導のもと、楽器づくりコーナーに移動し他の友だちとも交流しながら、身近な素材を使った楽器づくりを楽しんだ。とりわけ、ガチャケースマラカスやマリンシェイカーづくりでは、一人ひとりが自分たちの好きな音、意味のある音などを求めながら音を探していた。



図5 紙パック de ギロづくり（8月21日、筆者撮影）

4つのグループに分かれ、制作の時間を設けたあとは、自分たちのマイ楽器を用いて大学生と《情熱大陸》をアンサンブルできるよう工夫した。《情熱大陸》（葉加瀬太郎作曲）は毎日放送の制作による同名のドキュメンタリー番組にてオープニングテーマ曲として使われており、吹奏楽部・プラスバンドにおいて定番のレパートリーとしても演奏されることが多い。

大学生は子どもと出来上がった楽器で合奏することを念頭に、《情熱大陸》から抽出したリズム等を模倣させたり（図6）、動

きを取り入れたりしながらグループ活動に取り組む。そして、大学生が準備したトランペット、フルート、サクソフォン、ピアノ等の旋律楽器の演奏に合わせて、手づくり楽器のリズムを打つ。音楽の途中にはピアノの伴奏に合わせて、手づくり楽器のみのリズムを即興的に組み合わせながら子どもたちと一緒に音楽を楽しむ、という活動であった。

この場面を音楽科の教育内容の4つの観点から検討してみよう。大学生は楽器づくりのための材料の入手や製作工程表の作成に至るまで楽器の仕組みや発音原理などを理解し、それぞれ楽器の特徴を生かしたリズムパターンを工夫した（形式的側面、技能的側面）。マイ楽器を活用したアンサンブルにおいては、子どもがリズムパターン（図6）を演奏できるよう支援し、指揮者のサインに従って音を止めたり、呼吸を合わせて全員一定のリズムを打ったりするなど一体感を感じる演奏となるよう努めた。それには楽曲の全体像を把握して子どもを導く音楽的能力が必要であろう（技能的側面）。



図6 大学生が考案したリズムパターン②

表2 手づくり楽器の製作工程（2019年8月21日）

<h3>紙パックギロ作り方</h3> <p>① 紙パックに両面テープをはいていく</p> <p>② スローをセロハンテープでつける</p> <p>③ 画用紙に絵を書く</p> <p>完成</p>	<h3>おうかんカスタネット</h3> <p>① ながいダンボールとわじかいダンボールをセロハンテープではりつける</p> <p>② おうかんをダンボールのほしにほりつける</p> <p>③ スローをながいダンボールのわじかにほりつける</p> <p>完成</p>
<h3>＜ガチャケースマラカス＞</h3> <p>① ガチャケースを1つとろう。</p> <p>② ガチャケースの中に入れたい物を入れよう。</p> <p>③ 好きな音がでたら、ガチャケースをテープでまく。</p> <p>④ スプーンを2つとしてテープでとめる。</p>	<h3>マリカ</h3> <p>① ようきを選ぶ</p> <p>② ビーズはようきの中に入れる</p> <p>③ フタを閉めて、テープでとめる</p> <p>④ ようきにかざりつづける</p> <p>⑤ 完成!!</p>

※「器楽特講」の受講生が作成したものである。

このように身の回りの素材を用いて楽器をつくり、マイ楽器を活用してアンサンブルを行う活動においては、音楽的能力の向上および音・音楽に対する知識や技能が学生に求められる。言い換えれば、「楽器にチャレンジ」では指導内容の形式的側面と技能的側面が中核をなしているといえよう。一方、子どもが感じたり考えたりすることで、豊かな感性を育てるための内容的側面からのアプローチは依然として不足していることも否めない。

部分的ではあるが、ガチャケースマラカスづくりの活動に

おいて、ガチャケースに様々な素材を入れて音を聴く場面では、大学生は子どもに「自分の好きな音を探そう」「どんな感じがする?」「みんなの音を聴いてみよう」「どんな音がするのか」などと意図的に問いかけた。然るに自分たちが感じ取ったことやイメージしたことを言語化して伝えることは上手くできなかった。結局、子どもとは初対面であることを考慮し、これ以上は無理に回答を求めないこととしたが、子どもの内面をどのように育てるべきかを考えさせられる場面であった。



### 3. 分析結果

「楽器にチャレンジ」は、普段、文化芸術に触れる機会の少ない中山間地域の子どものもとへ学生が出向き公演や体験活動を行い、子どもの創造性、自主性、社会性などを養うことを目的としている。2018 年からは大学が主体となり、地域貢献活動として位置づけ、教科教育・教科専門の教員が融合を図りながら「器楽特講」の授業を実施している。

その大まかな内容は、学生が日ごろ教員養成大学・学部にて研鑽を重ねている専門楽器の紹介と演奏、そして手づくり楽器を製作し子どもと行う共演などである。ここでは子どもが受動的に音楽を享受することを避け、より積極的に音楽と関わるよう教科内容を構成している。

音楽科の指導内容の4側面からみると、楽器の仕組みや構造の理解の下、子どもに楽器づくりの楽しさを伝えることに重点が置かれている。そのうえ学生には、リズムパターンを教える、もしくは一緒にアンサンブルを楽しむため器楽の表現技能が求められる。このように「楽器にチャレンジ」は、つくる過程から演奏する活動へと学びの連続性をもたせる意図があるものの、いずれも音楽の形式的側面と技能的側面が教育内容の中心となっている。

教員養成学生が、イメージ・感情・特質などの内容的側面を意識すると、学習の対象が明瞭となり「質」への認識能力が高まる<sup>19)</sup>という。すなわち、普段の演奏活動において、個人の内的経験と音楽との相互作用により、自らの音や音楽の世界をつくり上げることが出来る。また、子どもを対象とした教育活動においては、教える内容が明確となり人間形成に寄与することが出来る。

### Ⅲ 結論と考察

音楽科教員養成における教科専門科目「器楽特講」では、教科教育と教科専門の教員が協働し、地域貢献できる資質の高い教員養成を目指して、子どもの発達や成長に寄与するための教材開発を試みている。活動の中核をなす「楽器にチャレンジ」では、子どもが実際に楽器をつくり、音を鳴らす体験を踏まえた音楽活動や遊びを考えることで、より積極的に音楽と関わるよう教科内容を意識している。

具体的に、子どもは大学生による楽器紹介の説明を聞いたり、楽器づくりの過程を理解したりして音楽活動を楽しんだ。また、楽器をつくって終わる体験に留まらぬよう、つくった楽器を用いて大学生とアンサンブルできるように工夫した。このように大学生が主体となり、小学生対象の「楽器にチャレンジ」を企画・運営する活動では、知識・技能の習得のみならず、実践的指導力の育成に資する教育内容であることが確認できた。それは、学校教育を支える様々な場面を想定しながら子どもとコミュニケーションを交わす際にも見取ることができた。

しかし「器楽特講」の教育内容は、音楽の形式的側面、技

能的側面、文化的側面の観点から構成しているが、内容的側面からのアプローチは不足していることがわかった。子どもの発達や成長に寄与するためには、音楽の感じ方や表し方を自由に話し合う環境づくり、あるいは豊かな感性を育てるための働きかけの重要性を認識する必要がある。

特に、実技を専門とする科目においては、演奏発表に重点が置かれるため、学生自身が演奏技術のみに意識が向くことが多く、聞き手を置き去りにした単なる自己満足な表現に陥りやすい。その結果、音楽特有の感性を聞き手に完全に委ね、音楽の情動的な意味を蔑ろにすることもある。教科専門と教科教育の連携や接続により、教員養成学生が音楽の教科内容（とりわけ、内容的側面）を意識することは自身の表現を客観的に捉える機会となり、実技系教科専門においても効率的に深い演奏表現に到達する一つの手段として有効であると考ええる。

こうした取り組みは、教員養成大学・学部教育の質向上のため、教科専門と教科教育が協働して教育内容を体系化したものである。教科専門と教科教育の両方の立場から教育内容に取り組むことで、幅広い視野をもって演奏と教育の橋渡しができる人材を育てており、音楽科教員養成の独自の専門性として期待できよう。

今回は、教員養成学生に焦点を当てて学びの詳細を明らかにしたが、その大半は筆者が定めた分析の視点によるものであった。リフレクション（とくに、行為の中の省察）にスポットを照らした継続的な実践を行うことにより、体験活動の意義と課題を明らかにしたい。また、教員の資質・能力の育成において教科専門と教科教育をどのように繋げるかを検討することで、教員養成や教師教育の在り方を提案したい。

### 謝辞

このような実践研究は、受け入れてくださる地域の方々なくして成功はない。主催してくださる方々や協力してくださる中学、高校の先生方、ご来場くださる方々に謝意を表するとともに、知の拠点の一つとして研究成果を還元できるよう、地域の文化振興の一端を担えるよう、活動を継続していきたい。とりわけ、この研究を遂行するにあたり、ご協力いただいた「大宮スクスクの会」に感謝申し上げる。なお、本研究は令和元年度高知大学教育学部長裁量経費の助成を受けたものである。

### 注・参考文献

- <sup>1)</sup> 西園芳信、増井三夫編著（2009）『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房、1 頁



- <sup>2)</sup> 同上、3 頁
- <sup>3)</sup> 小島律子 (2002)「音楽科教育と教科専門との関連を考える」『大阪教育大学教科教育学論集』創刊号、73 - 75 頁
- <sup>4)</sup> 高知大学教育学部の令和元年 WEB 上のシラバスを参照  
<http://www-kulas.jimu.kochi-u.ac.jp/Portal/Public/Syllabus/Syllabus/> (2019 年 8 月 15 日閲覧)
- <sup>5)</sup> 鳴門教育大学コア・カリ開発研究会編 (2006)「教育実践学を中核とする 教員養成コア・カリキュラム - 鳴門プラン」暁教育図書同上、16 頁
- <sup>6)</sup> 同上、17 頁
- <sup>7)</sup> 文部科学省 (2018)「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 音楽編」、25 - 27 頁
- <sup>8)</sup> 三村真弓 (2013)「音楽科教員養成における教職と教科を架橋する構成原理を求めて」日本教科教育学会誌第 35 巻第 4 号、71 - 76 頁
- <sup>9)</sup> 同上書、75 頁より引用
- <sup>10)</sup> 林睦、大伏純子、杉江淑子、中根庸介、若林千春、渡邊史 (2017)「教員養成における初等音楽内容学の授業研究：滋賀大学音楽教育講座による授業改善の取り組みをもとに」滋賀大学教育学部紀要第 67 号、205 - 217 頁
- <sup>11)</sup> 河邊昭子、草野次郎、木下千代、野本立人、河内勇 (2017)「教科教育と教科専門の協働による『音楽科教育法 II・III・IV』の実践」兵庫教育大学研究紀要第 51 巻、139 - 151 頁
- <sup>12)</sup> 小坂達也、佐々木直樹、藤田英樹、小谷充、川路澄人、境英俊、西村寛、原丈貴 (2019)「芸術・実技系教科における実践的教育活動の現状と課題」島根大学教育学部紀要 第 52 巻、24 - 34 頁
- <sup>13)</sup> 高知県の東部に位置する香美市香北町は面積の約 90%が森林となる中山間地域である。
- <sup>14)</sup> 「大宮スクスクの会」は、地域や学校機関と連携して、子ども達の健やかな夏休みの居場所づくりを促進し、異年齢児間の遊びや他学校区との交流を通じて、子どもたちの創造性、自主性、社会性などを養うことを目的として活動している。
- <sup>15)</sup> 第 1 回では、「英語にチャレンジ」「お料理づくりにチャレンジ」「ハンドベルにチャレンジ」など、14 項目のチャレンジコーナーが設置された。このうち、高知大学教育学部が関わったコーナーは、幼児教育コースの「あそぼーや」と音楽教育コースの「楽器にチャレンジ」であった。梶原彰人ほか (2018)「音楽・美術の実演と創作を介した異校種間交流 第 2 回サマーチャレンジ! スクスクール『アートであそぼう』での実践を通して」高知大学編『教育実践研究』第 32 号、139 - 146 頁
- <sup>16)</sup> 幼児教育コースの学生が学外に赴いて、その地域の子どもたちが遊ぶ機会を増やせるために行う地域子育て支援活動
- を意味する。
- <sup>17)</sup> 作曲・歌は、The Champs (チャンプス) 所属のサクソ奏者ダニエル・フローレス (Daniel Flores/1929-2006)。
- <sup>18)</sup> 日本教科内容学会のプロジェクト研究「教員養成における教科内容学研究」の配布資料より (2018 年 6 月 30 日)

